

---

# ホットホットチョコレート

あぶらあげ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホットホットチョコレート

### 【著者名】

あぶらあげ

### 【あらすじ】

男の子と女の子。微笑ましい日常。ですが今日はずし違つよつです。

早朝から口が高い。

起きて3秒。

良く焼けた地肌に薄手のシャツをひっかけて、  
短パンサンダル肩掛けかばん。  
朝飯のフルーツを頬張りながら、

「いってきます」

男の子は今日も学校である。

「今日は、チコロをあげる日なのよ」

バス停で待ち合わせるのは、幼馴染の女の子。  
学年の女の子の中でも誰よりも背の高いその女の子は、外見も目立つ  
が声もよく通る。

「おばあちゃんが言つてたの、昔は手作りのチコロをあげたものだ  
つて」

「なんだよそれ、聞いたことねーんだよ

聞いたことがないどころか、馬鹿にした様子で男の子、あの男の子  
である、は大声で返す。

かなりの大声だが周りは気にしていない。というかそれぐらいしないと聞こえないのだ。

朝のバス停は、人で渋なのだ。

「おばあちゃんがそう言つてたの、私も昔あげたって」

「おめえのばあちゃん、ぼけたんじやねえのか？！…いつてー」

女の子が男の子を、いわゆるげんこつした。身長差から言つてほほ真上からである。あれは痛いだろう。

「Jの馬鹿力女っ！」

これが、ふたりの日常だった。

しかし男の子は気づいていた。最近、げんこつがそれほど痛くない。昔のように真上から振り下ろされている感じがしないのだ。

事実、彼は成長期にあり、早熟の女性である彼女を、ごく近いうちに背も力も軽々と越えて見せるだらう。

男子は痛みが和らいだことを素直に歓迎していた。しかし、やはり、同時に何か落ち着かないものを感じるのだった。何かが変わるとしているような、そんな予感。

痛みも治まり、男子が頭をなでると、女子は意を決したかのように、それでいてつっけんどんに、

「だから、私も作ってきたのよ、はい」

男子の胸に押しつけられたものは、はたしてチョコレートである。

「溶けるから、早く食べなさいよ」

確かにこの気温では、チョコレートなどすぐに溶けてしまつだらけ。今日女子の荷物がすこし大きかつたのは、保冷剤とのチョコレートの分だつたらしい。

そんなことより、男子はきれいにリボンなどで包装してあるそれを抱えてこるのが、なんだかたまらなく恥ずかしくなつていた。

「えー、おれいらないよ。朝から食べたくない。返す」

よく見もせぬ考へもせず、横に投げて返した。

「あやつ」

それは女子の顔にあたると、地面に落ちた。

乾燥した地面に落ち、砂まみれになつた包みを見て、男子はしまつたとは思つたが、女子を見たとき、完璧な後悔へと変わつた。

彼女は泣いていた。

彼は、その時自分が何をしたのかを一瞬にして理解したのだった。

砂まみれの包みを捨う男子。

女子の頬には、すでに溶けていたのだらけ、チョコレートがついていた。

男子はそれを人差し指で取つて、口に運んだ。

苦い。

「おこしくねーよ、馬鹿」

女の子は答えず、また少し泣いた。

もうすぐ一人は卒業式だ。

(後書き)

未来のバレンタインを想像しました。  
温暖化の影響はこんなとこにも笑

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5035f/>

---

ホットホットチョコレート

2011年1月27日07時00分発行